

富永神社祭礼奉納

とき 平成十三年十月十二日(金)
午後四時四十五分始
ところ 富永神社 能楽殿

能

組

養月宮老 平野瑞季
田月宮殿 島野尚太郎
玉田村 平野阿裕美
葛村 島野考三郎

狂言

盆山

益人山本隆平

何某渡辺久詩
後見畑中良雄

仕舞

仕舞

岩船慶船 今泉尚美
船弁慶 松尾明海
紅葉狩 中嶋美瞳
今泉友美

仕舞

花筐 今泉孝子
鞍馬天狗 谷野允千帆

舞囃子

草紙洗小町 中嶋

薰 大鼓清水利高
小鼓今岡アイ子

笛 今泉英三

狂言

末広かり

果報者 大原正巳

太郎冠者 天野雅夫
三ツハ 酒井宏
後見畑中良雄

独調

天鼓

長田 驍

塩瀬民子

連調

葛城

ナリ

高林 高林 高林
白牛 白牛 白牛
口二 口二 口二

永田 鈴木 鈴木
聡子 芳子 寿枝
小林 寿枝

(休 憩 三十分)

狂言

名取川

僧畑中良雄

某権田重紘
後見中山伸一

地注 天野雅夫
今枝靖雄
佐藤正巳
大原正巳

4:45分頃

5:00分頃

5:30分頃

5:45分頃

6:15分頃

7:00分頃

7:30分頃

能

玉

子清水利高

葛

間佐藤融

子竹内省吾

小鼓福井村

大鼓総一郎

笛今泉英三

8:20分頃

狂言

花

折

新発意住持酒井谷

至宏男

花見家

加藤賢一

山本勝一

山口俊一

安形忠久

中山伸一

西山好夫

8:50分頃

能

猩

子中嶋康夫

々

子土肥耕一郎

大鼓清森田

小鼓水利高收

太鼓助川龍夫

後見鈴木

肇

地謡

牧野修 太田康弘
竹内省吾 高林牛口二
今泉英三 高林白二
竹内三郎 高林白二
太田研司 田中洋二

(終了予定九時三十分頃)

主催本町区

あ ら す じ

狂言

盆山 ほんざん

流行の盆山を知人の庭へ盗みに入ったのですが、家人に見付けられあわてて盆山の陰に隠れました。それと知ったその家の主は、ことを荒立てずに帰そうと、犬だ、猿だからからかい始めます……。

狂言

末広かり すえひろがり

果報者（主人）が正月に正客に贈る引き出物として、末広がり（扇の一種）を太郎冠者に命じて都へ買いにいかせる。末広がりがどんな物か知らない太郎冠者が「末広がり買おう」と呼び歩いていると、スッパ（詐欺師）につかまってしまふ。田舎者とみてとったスッパに騙されて、から傘を買ってきてしまいました。すっかり腹を立てた主人の機嫌を直そうと、スッパに教わった囃子物を囃し謡ってみる。機嫌の悪かった主人も共に『傘をさすなる春日山、これも神の誓いとて、人が傘をさすなら、我も傘をさそうよ』と浮かれ出し、主従仲よく囃して回ります。

狂言

名取川 なとりがわ

比叡山で受戒した僧が、「希代坊」と「不祥坊」という二つの名をもらう。物覚えが悪い僧は、名前を両袖に書いてもらいますが、帰る道々名を覚えるために口ずさんでいくと、大きな川にぶつかる。渡ろうとして深みにはまり、岸にはい上がって袖をみると大切な名が消えている。あわてて笠で名をすくっていると、ころへ土地の者が通りかかる。川の名が名取川、相手が名取の某ときいて、僧は名を返せと迫るが、某が当惑してつぶやいた「きたいな人」「ふしような所」という言葉から名を思い出し、喜びの謡を謡う。

能

玉葛 たまがせら

諸国一見の旅僧が、奈良の社寺を巡拝の末、初瀬の長谷観音へ参詣に出かけます。初瀬川の辺りまで来ると、一人の女性が、底も浅い山川の岩間伝いに小舟に棹さしてやって来ます。不審に思つて言葉をかけると、女は自分も長谷寺へ詣でる者ですと答え、「海士小舟初瀬の川」と古歌にも詠まれていますから、舟に乗っていても不思議ではありませんと答えます。そして、僧を二本（ふたもと）の杉へ案内し、玉葛内侍が筑紫から都へ逃げ上り、此所へ来たところ、母夕顔の侍女右近に巡り合ったことなどを語り、自分はその玉葛の亡霊であるとほめかして消え失せます。（中入）

僧があわれに思つて、読経していると、玉葛の亡霊が現れ出て、乱れた思いに狂い舞いまですが、やがて昔の事を懺悔して妄執を晴らし成仏したと見るや、僧の夢もさめました。

狂言
花折

寺の庭の桜が今年も満開となりました。ところが住持は、今年は花見禁制と固く新發意に言いつけて外出します。例年のように花見客が大勢訪れますが、新發意は言いつけ通りに中へ入れません。仕方なく花見客は垣の外から花を眺めて宴会を始めますが、今度は酒好きの新發意の方が我慢できなくなって、とうとう花見客を寺の庭に入れ、舞えや謡えの酒盛りに加わってしまう。酔った勢いで帰る花見客に桜の枝を与え、寝入ったところへ住持が戻り、事の次第がばれて追いかまれる。

能
狸々

中国のカネキンザンの麓に、高風たかかぜという大そう親孝行で評判の高い男がいました。彼はあの夜不思議な夢を見ました。それは楊子ようしの市に出て酒を売ると、富貴の身になるというので、その夢のお告げの通りすると、なるほど次第に金持となりました。ところで、市のたつごとに高風の店へ来て酒を飲む者がいます。その男はいくら飲んでも顔色が一向に変らないので、ある日その名を尋ねると、海中に住む狸々だとあかして帰って行きました。そこで高風は、ある月の美しい晩、今度は潯陽そんやうの江のほとりに出、酒壺を置き、狸々の出てくるのを待つことにします。(ここまでの経過をワキ高風が一人で語り、能はここから始まります)やがて狸々は、薬の水とも菟の水とも呼ばれる銘酒の味をしたい、良き友と会う事を樂しみに、波間から浮かび出て、高風と酒をくみかわします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音をかんで、波の音は鼓の調べのようにひびきます。この天然の音楽にのって、狸々は舞い出します。そして、高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えてゆきます。